

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：32651

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K10292

研究課題名(和文)調剤薬局において薬剤師と看護師の連携・協同によるがん患者支援の挑戦

研究課題名(英文)Pharmacy pharmacist and nurse collaboration and collaborative cancer patient support challenge

研究代表者

佐藤 正美 (Sato, Masami)

東京慈恵会医科大学・医学部看護学科・教授

研究者番号：60279833

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：薬局に訪れるがん患者と家族は、薬局薬剤師と病院の看護師そして病院薬剤師との連携と協同により、質の高い医療とケアを受けられる可能性が明らかとなった。薬局薬剤師は看護師を患者へのケアを担うキーパーソンとして期待しており、力を借りたいと思っていた。しかし、薬局薬剤師は病院の看護師は接点がなく、互いの活動を理解しておらず相談できずに困っていた。交流の場を設けること、現存するトレーシングレポートを活用することによって調剤薬局薬剤師と病院看護師との連携が図れる可能性を見出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

全国でコンビニよりも多い店舗数がある薬局は、地域包括ケアシステムの中で重要な役割を担うことが期待されている。がん治療では、分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬など薬物療法の進歩が著しく、今後さらに調剤薬局を継続的に利用するがん患者は増える。病院と薬局との連携体制を整備するため、2020年度診療報酬改定で「連携充実加算」が新設された。しかし本研究成果から、調剤薬局の薬剤師とがん治療を行う病院の看護師とは接点がなく、互いの活動を理解しておらず薬剤師は相談できずに困っていることが明らかとなった。交流の場の設定と現存するトレーシングレポートの活用が、連携する突破口となる可能性を見出すことができた。

研究成果の概要(英文)：It became clear that cancer patients and their families visiting the pharmacy could receive quality medical care and care through collaboration and cooperation between the pharmacy pharmacist, the hospital nurse, and the hospital pharmacist. Pharmacy pharmacists expected nurses to be key players in patient care and were willing to help. However, the pharmacy pharmacists had no contact with the hospital nurses, and they did not understand each other's activities and were unable to consult with each other. We discovered the possibility of collaboration between pharmacy pharmacists and hospital nurses by providing a forum for exchange and by utilizing existing tracing reports.

研究分野：臨床看護学

キーワード：調剤薬局 保険薬局 看護師 薬剤師 がん薬物療法 連携 チーム医療

1. 研究開始当初の背景

(1) がん患者にとって、手術やがん薬物療法、放射線治療は身体的苦痛をもたらす治療である。同時に、治療による身体機能や生活の変化への適応に苦悩し、完治するかの不安にさいなまれる。2014年に発表された国立がん研究センターによる Public Health Center-based Study (JPHC study) [1]では、がんの診断から1年以内に自殺による死亡の相対リスクは、がんと診断されていない集団と比べて約20倍であった。夏田[2]も、がんの診断早期に自殺が発生する傾向にあるため、身体イメージが変化する術後患者へのメンタルサポートの必要性を指摘している。浅野[3] (2008)は、消化器がん手術後患者と家族は、外来看護師の関わりにより心理的安寧を得て、身体状況を現実認知し、自ら克服するための内なる力が引き出され適応へ向かうことを証明した。

ところが、医療法施行規則における外来看護職の配置基準は、患者30名につき看護職1名であり、戦後昭和23年から変わっておらず、必要とされる外来患者の在宅療養上の相談・支援に対応するのは限界がある。がん診療連携拠点病院には、がん相談支援センターが設置され、がん患者および家族の相談場所として機能している。がん診療連携拠点病院現況報告書より、平成26年6~7月2か月間のがん相談支援センター401か所の相談件数は130,643件で、1施設の平均は325.8件であった。しかし通院しているがん患者ははるかに多い。がん診療連携拠点病院に通院するがん患者222名の療養生活上の悩みや困難を調査した脇屋ら[4] (2016)の結果では、身体的苦痛と心理的な悩みが多く、相談相手は家族が最も多く次いで医師であった。専門的知識のない家族や、短時間の外来診療の医師では、悩みを解決できるとは到底考えられない。がん患者を取り巻く外来の現実である。

(2) 全国の調剤薬局は2018年度末の厚生労働省による調査では59,613店舗あり、コンビニエンスストアの55,769店舗(2020年5月日本フランチャイズチェーン協会の調査)よりも多い。平成25年度厚生労働科学研究による「薬剤師が担うチーム医療と地域医療の調査とアウトカムの評価研究」で「薬局の求められる機能とあるべき姿」が公表された(平成26年1月)。平成28年4月からは、かかりつけ薬剤師・薬局として薬に関する相談以外にも健康に関する相談に応じる「健康サポート薬局」がスタートした。このように地域包括ケアシステムを推進していくために薬局は、地域住民にとって医療専門職による健康サポートが受けられる重要な場所とし、さらなる発展を秘めており、また期待されている。

2. 研究の目的

調剤薬局を利用するがん患者およびがん患者家族に対し、より質の高い医療とケアの実践へ向けて、薬局薬剤師と看護師による連携を基盤とした支援モデルを検討するために、本研究では以下のことを明らかにする。

- (1) 調剤薬局を訪れるがん患者と家族へのケアニーズを薬局薬剤師の視点から明らかにする。
- (2) 薬局薬剤師および看護師は、互いに連携することの必要性と可能性、さらに課題について、どのようにとらえているのかを明らかにする。
- (3) 上記(1)(2)より、がん患者と家族に対し、薬局薬剤師と看護師による連携内容と方法を検討する。

なお本研究においては、調剤薬局薬剤師を薬局薬剤師、病院勤務の薬剤師は病院薬剤師と記し、看護師とは病院勤務の看護師を表すこととする。

3. 研究の方法

(1) 薬局薬剤師を対象としたフォーカスグループ・インタビュー

薬局薬剤師ががん患者と家族から受ける相談内容と対応に苦慮することを明らかにし、さらに薬剤師がとらえる看護師との連携上の問題と願いを明らかにすることを目的とした。

対象は、関東圏内の調剤薬局4か所に勤務する薬剤師15名であった。勤務薬局ごとにフォーカスグループ・インタビューを行い(2019年8月)、インタビュー内容の逐語録をデータとして分析し、質的データ分析支援ソフト NVivo を用いてコードを作成し、それをグループ化して整理した。薬局はいずれも総合病院前にある門前薬局であった。

(2) がん看護専門看護師を対象としたエキスパートパネル

上記(1)の結果を示し、看護師と薬局薬剤師との連携上の問題と課題、可能性について見出すため、広くがん患者へのケアと医療を捉えることができる看護専門職としてがん看護専門看護師を対象として、エキスパートパネルを開催した(2020年7月)。

対象はがん看護専門看護師4名(病院勤務3名、訪問看護事業所勤務1名)で、COVID-19感染拡大の中であったため、オンライン会議システムを用いて実施した。エキスパートパネルの内容は録音して逐語録を作成し、質的データ分析支援ソフト NVivo を用いて分析した。

(3) がんに関する専門的知識を有する薬剤師を対象としたエキスパートパネル

看護師と薬局薬剤師の連携による支援モデルの検討を目的として、がんに関する専門的知識を有する薬剤師 9 名を対象にエキスパートパネルを開催した。4 名と 5 名のそれぞれ 2 回の会議を開催した(2020 年 9 月)。調剤薬局を訪れるがん患者と家族へ、薬局薬剤師と看護師が連携するための課題として看護師がとらえた結果の上記(2)を(1)の結果と合わせて示した。COVID-19 感染症予防のために、エキスパートパネルはオンライン会議システムで行った。エキスパートパネルの内容は録音して逐語録を作成し、質的データ分析ソフト NVivo を用いて分析した。

4. 研究成果

(1) 調剤薬局を訪れるがん患者と家族へのケアニーズ

薬剤師が受ける相談内容は、抗がん薬の副作用症状への対処方法、具体的なケアの方法、これから先の治療について、仕事を継続したいことや治療費などの社会的な困りごと、家族として患者への対処方法、生きる望みを持たずに疲弊しているなどであった。薬剤師は「薬局は患者にとって最後の砦」であるのとらえ、ケアを必要としている患者を支援したいと願っていた。患者が困らないように、患者に関する情報を病院と共有し病院で行われた指導とケアを継続していきたいと願っていた。しかし、病院との連携や情報共有はされていないため、患者の背景や状況を一から尋ねなければならず、困難さを感じていた。ケア方法や生活の注意について尋ねられても、具体的な処置方法やケア方法がわからず治療経過もわからず対応できずに困っていた。また、悲嘆に暮れている患者へどのように対応したらよいかかわからず困っていた。看護師とつながることで、病院での看護師による指導内容やサポート資源を知りたいと望んでいたが、看護師との接点は全くなく、どのような看護師が外来のどこで何をしているのかかわからず、問い合わせもできずに困っていた。

薬局薬剤師は、がん患者と家族からセルフケアの方法や生活上の注意について相談を受けたり、情緒的反応を目の当たりにしたりして何とかしたいと思いつつも、その対応に難渋していた。がん患者と家族を支援したいが、治療や生活の背景を知る手掛かりは「処方箋」のみで情報不足であり、困っていた。看護師を患者ケアのキーパーソンとして認識し、情報交換したいと思うものの、病院や看護師とも接点がなく看護師の活動もイメージできず、行動できない状況であった。本結果は 7 か所に勤務する薬局薬剤師 7 名を対象としたインタビュー結果[5]と類似していた。

(2) 薬局薬剤師と看護師の連携について

がん看護専門看護師から

がん看護専門看護師が、薬局を訪れるがん患者と家族の相談ニーズと薬剤師の願いを知り、薬局薬剤師と看護師が連携するために挙げた課題は [薬局薬剤師が患者のためにカンファレンスや患者が受ける説明場面に参加する] [顔の見える関係を作る] [互いが持っている情報を共有する] [互いに考えていることと実践内容を理解する] [専門性を持ち対等な立場で患者のケアと一緒に取り組む] [窓口を明確にする] [病院にいる私たちができることを考える] [薬局の強みやサービス内容を周知する] [薬剤師がどうしたいと思っているのかを知る] [薬剤師と看護師のそれぞれが何をするのかを分かるようにする] であった。病院薬剤師と普段から対話し、仕事をしているエキスパートナースでさえも、薬局薬剤師の仕事内容や活動についてはよく知らないのが現状であった。

がんに関する専門的知識を有する薬剤師から

エキスパートパネルではがん看護専門看護師によるエキスパートパネルの結果を示したことから、患者と家族を中心に考えケアを提供する上で、現状ある多くの問題と課題が挙げられた。看護連携(看護師と薬剤師の連携)に関しては、[お互いの業務内容など求めていることが把握できていない] [病院での看護師の具体的な仕事かわからない] [病院にどんな専門性を持った看護師がいるのかかわからない] [看護師が自分たちの仕事を理解してもらえていないと思うのと同じに、薬剤師も理解してもらえていないと感じる] [看護師も薬剤師もお互いの強みを知らない] [看護師と知り合う機会がない] など互いの接点がなく知らないことが挙げられた。また、薬薬連携(病院薬剤師と薬局薬剤師との連携)に関しても [トレーシングレポートはできているが、病院側の受け取る体制ができていない] と課題も示されたが [病院側が連携に重きを置くようになり薬局も薬薬連携に意識が向くようになってきている] と、連携充実加算により連携が推進される背景にあることが示された。また [入院してる患者に比べて外来患者は生活上のケアができていない] [患者の情報が処方箋と本人からの聞き取りだけであるため情報不足である] [薬剤師は日常生活における工夫や対処についての指導は力不足である] [患者の生活環境や食生活へのより踏み込んだ提案ができていない] と薬剤師自身の問題も挙げられた。

看護師との連携については [看護師と連携することで病院の医療チームとも関わりやすくなる] [薬局薬剤師、看護師それぞれにある強みを連携することで活かせると思う] [医者と話ず機会の多い看護師は、医者の意を汲むのがうまい] [看護師は患者の日常に沿った指導を具体的にできる] と、看護師と連携することでより良いケアにつながることが挙げられた。

(3) 薬局薬剤師と看護師の連携へ向けて

病院の中ではチーム医療として、薬剤師と看護師がチームとして一緒に活動しているが、病院

外となると実際にチームを組む場面は限られている。薬局薬剤師は在宅看護をしている訪問看護師との接点はあるが、病院看護師との接点はなくお互いによく知らない。そのことが連携を難しくさせていると考える。薬剤師は看護師が医師や患者との関係構築や患者に合った生活指導を得意としている、ととらえていた。交流を持つことによって、薬剤師から看護師への相談が増え連携が進むことが期待できる。

本研究は調剤薬局を利用するがん患者およびがん患者家族に対し、より質の高い医療とケアの実践へ向けて、薬局薬剤師と看護師による支援モデルを検討することを目的とした。互いに連携することで質の高いケアを実現できることは確信ができた。しかし、今まで接点がなく互いに知り得ていないことが明らかとなった。そのため、具体的な方法を示す連携による支援モデルを作成するには、まずは薬局薬剤師と看護師、そして病院薬剤師と医師を含めた交流を進めて、連携につながるきっかけとなる場を計画することが必要である。また本研究の遂行途中であった2020年度の診療報酬改定で「連携充実加算」が導入された。がん薬物療法を受ける患者を中心に、病院と調剤薬局をつなぐ重要な診療報酬の算定である。しかし調剤薬局を訪れるがん患者の生活を支援するには、その療養生活への支援を専門としている看護師との連携は全く注目されていない。連携充実加算が、内実ともに連携の充実を後押しするには、看護師の存在は不可欠である。今後は患者と家族を中心にとらえ、看護師も含めて調剤薬局と病院との連携を進めていく必要がある。

文献

- [1] Yamauchi T1, Inagaki M, Yonemoto N, et al (2014): Death by suicide and other externally caused injuries following a cancer diagnosis: the Japan Public Health Center-based Prospective Study. *Psychooncology*, 23(9), 1034-1041.
- [2] 夏田洋幹 (2016) : 3 大疾病保障生前給付後の自殺に関する分析, 日本保険医学会誌, 114(2), 199-211.
- [3] 浅野美智恵, 佐藤禮子 (2008) : 消化器がん術後患者と家族員の社会復帰を促進する効果的な外来看護, 日本がん看護学会誌, 22(2), 23-33.
- [4] 脇屋友美子, 伊東直美, 真壁玲子ほか (2016) : 通院がん患者の療養生活上の課題, 福島県立医科大学看護学部紀要, 18, 21-34.
- [5] 佐藤正美, 望月留加, 務台理恵子 (2018) : 調剤薬局を訪れるがん患者・家族から薬剤師が受ける相談内容 看護師との連携をめざして, 第 38 回日本看護科学学会学術集会講演集, 035-2.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐藤正美
2. 発表標題 がん患者と家族に対する保険薬局薬剤師と看護師の連携 による支援モデルの開発（第2報） がん看護専門看護師とがんに関する専門的知識を有する薬剤師への調査より
3. 学会等名 第27回日本緩和医療学会学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐藤正美
2. 発表標題 がん患者と家族に対する保険薬局薬剤師と看護師の連携による支援モデルの開発（第1報） 薬剤師へのフォーカスグループ・インタビュー調査より
3. 学会等名 緩和・支持・心のケア合同学術大会2020
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐藤正美
2. 発表標題 看護師と薬剤師の連携に関する文献研究
3. 学会等名 第11回日本医療福祉連携教育学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤正美
2. 発表標題 調剤薬局に訪れるがん患者・家族から薬剤師が受ける相談内容 看護師との連携を目指して
3. 学会等名 第38回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	務台 理恵子 (Mutai Rieko) (50737327)	東京慈恵会医科大学・医学部・助教 (32651)	
研究分担者	望月 留加 (Mochizuki Ruka) (10412991)	東京慈恵会医科大学・医学部・准教授 (32651)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	鳥越 一宏 (Torigoe Kazuhiro)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------